

日本語母語話者の雑談における「うん」と「そう」

- フィラーとして用いられる場合 -

佐藤 有希子*

‘UN’ and ‘SO’ in Japanese Casual Conversation between Native Speakers: The Use of Fillers

SATO Yukiko*

The purpose of this study is to examine functions of ‘un’ and ‘so’ as fillers. A “filler” is defined as a speaker’s expression that doesn’t have substantial meaning or concrete referent.

The data consists of 5 conversations between 2 Japanese native speakers. The sum total recording time is 3.5 hours. “Turn” is used as the unit of analysis.

As a result, the following points have been clarified. ‘Un’ was used for 3 functions: 1) as an opening signal at the head or middle of a turn, 2) as a follow-up at the head of a turn, and 3) to show the speaker’s conviction towards his previous utterances at the end of a turn. So, on the other hand, ‘so’ was used for an opening signal at the head or middle of a turn. Although the point of difference between ‘un’ and ‘so’ was not so mutually exclusive, they portrayed different meanings when a speaker used them to talk about his opinion or relay a story. Here, ‘un’ shows the speaker’s conviction towards the next utterance. On the other hand, ‘so’ shows that a speaker is still thinking or just noticing what to speak about. At the end of a turn, both ‘un’ and ‘so’ communicate the speaker’s conviction towards his previous utterances.

フィラーとしての「うん」と「そう」

会話では、実質的な情報伝達のほかに、一見、意味伝達に関わっていないような表現が見られる。

たとえば、(例1)の場合、「なんか」「うん」「まあ」は、なんらかの先行文脈を指しておらず、また、実質的な意味を持たない表現である¹。

(例1)

- | | |
|---|--|
| 1 | JS3: それで あとねー なんか
日本兵もー 殺したりとかい
うのがあってー (うんうん)
とか そういう事実もあるの
にー (うーん) そういう
のは 無視してるとかいう
(あーあー) うん なんか
そんな看板 (うーん) 掛
けてあったりしてねー. |
| 2 | JS4: まあ 難しいとこだねー
(後略). |

* 名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程

続けて、(例2)を見てみる。

(例2)

- | | |
|---|---|
| 1 | JS5: (前略) どうしよう もう
決めた -? けっこう 進んで
る -? それだけ . |
| 2 | JS6: 全然 っていうかね あたし
ね 今ねー そう 先生の
バイト やっててねー
なんか (うんうんうん)
あの一 ほら あの一
なんだっけ えーと ソシテ
アを 開発しててー (あ)
なんか 実験を . |
| 3 | JS5: すごいね . |

(例2)の「そう」「なんか」「あの一」などの網掛けされている表現も、会話において実質的な意味を伝達しておらず、特定の具体的な先行文脈を指しているわけではない。また、相手の発話に対する応答や相づちとして用いられたものでもない。

本稿では、このような表現をフィラーと捉えることとする。フィラーは、「話し手が用いる、実質的な意味や具体的な指示対象を持たない表現形式」である。

Halliday and Hasan (1976) は、言語体系の主要な機能的・意味的部門として、観念形成的 (ideational)、対人関係的 (interpersonal)、テクスト的 (textual) 部門を挙げている。

フィラーは実質的な意味を持たないため、何らかの命題内容を伝達する観念形成的部門ではなく、対人関係的、あるいはテクスト的部門と関わりがあると考えられる。

このような性質を持つフィラー表現のう

ち、本稿では「うん」と「そう」に着目して分析を行う。「うん」と「そう」はともに、応答詞や相づちとして用いられることが多い表現である。

相づちは「話し手が発話権を行使している間に聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現 (堀口1997: 77)」である。(例1)(例2)の「うん」と「そう」は、話し手の発話中に用いられているので、相づちではない。また、これらの「うん」と「そう」は相手の質問などに対する応答として用いられたものでもない。

(例1)の「うん」は、直前の相手の「あーあー」に応じて出されたものと考えられる。先行研究では、このような「うん」は、具体的な意味を持った言語表現と結びついていないので、意味がないと結論づけているものもある (定延2002: 109)。また、定延 (2002: 95) では、(例2)のような「そう」は、照応詞の「そう」とつながりがあるため、希薄ながら照応詞の意味「先行文脈への言及」が残存していると述べられている。

定延では、「うん」「そう」は「意味がない」、あるいは「意味が希薄」とされているが、これらの言語表現は、会話においてどのような働きをするのだろうか。話し手が「うん」や「そう」を用いるのはなぜか。

本稿では、実際の会話に用いられた「うん」と「そう」を見ていくことで、会話において、これらの表現がどのような機能を持っているかについて考察を行う。

先行研究

従来、相づちや応答詞、照応詞の観点から研究されてきた「うん」と「そう」であるが、最近、感動詞や談話標識、フィラー

としての機能に着目した研究が出てきている。

主なものに、森山（1989）、田窪・金水（1997）、永見（2000）、山根（2000）、定延（2002）がある。

本稿で扱うフィラーとしての「うん」と「そう」に関する先行研究をそれぞれ以下にまとめる。

2.1 「うん」

2.1.1 田窪・金水（1997）

田窪・金水は、感動詞・応答詞を対話処理操作の心的モニターとして捉えている。

「はい」や「うん」などの応答詞が文末で用いられる場合、「こちらの出力が終わったので、そちらで処理に移らりたい」という信号として機能すると指摘している（p.265）。

2.1.2 永見（2000）

永見は、“filled pause”を発話産出時の問題処理に関わる心的操作標識とみなし、“filled pause”の各形式がどのような言語問題処理と関わっているかを分析している。

「うん」は自分の先行発話を承認しモニターするという認知処理状態を示すと指摘している（p.48）。

2.1.3 山根（2000）

「それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係にない、発話の一部を埋める音声現象」をフィラーとしている（p.43）。

フィラーの一つに「ウン」を挙げ、話し手の納得を示す機能を持つと指摘している。話し手は「ウン」の前における自分の発話を、自らに言い聞かせる、つまり自らを納得させるために発せられると述べている

（p.132）。

2.1.4 定延（2002）

定延は、感動詞「うん」の機能として次の6つを挙げている。

1) 非言語的なもの（痛み・悩み・驚き・感動といった生理的・心理的情報の受容時に発せられるもの）、2) 決断、3) 状況受容（感心、あきれ、不満、気づき、迷い、疑念、納得）、4) うながし、5) フィラー（「ん〜」）、6) 言語情報受容。6)の言語情報受容には、相手の発話に対する肯定応答と相手の発話を理解した印としてのあいづちが挙げられている。

感動詞「うん」は具体的意味を持った言語表現とは結びついておらず、むしろ、うめき・うなり・りきみ・せきばらいといった非言語的な「うん」と結びついている。したがって、感動詞「うん」に意味を認める根拠は見当たらず、感動詞「うん」には意味はない、記号ではないと認める方がよいと指摘している。

フィラーとしての「うん」に関する先行研究の指摘をまとめると、以下のようになる。

「うん」の機能

- ・自分の先行発話を承認しモニターするという認知処理状態（永見2000）
- ・自分の先行発話に対する話し手自身の納得を表明（山根2000）
- ・決断、状況受容（定延2002）
- ・文末で、「こちらの出力が終わったので、そちらで処理に移らりたい」という信号（田窪・金水1997）

2.2 「そう」

2.2.1 森山（1989）

森山は、談話において、発話内容や話し手・聞き手関係の調整を行うことを談話管理と呼び、談話管理に関わる談話標識として、応答の諸形式の意味と機能について考察している。

「ア ソウダ」や「アッ ソウソウ」という句表現は、新たな情報の展開を予告するので、聞き手は発話を待つとしている。そして、これらの表現は、展開制御系の機能を持ち、特に転換という談話展開の方向づけに使われると指摘している。

2.2.2 定延（2002）

定延が指摘した感動詞「そう」の機能は、次の6つである。1)自分および相手の発話に対する肯定応答、2)疑念(「そお～?」)、3)合格点を出す、4)了解、5)気づき(思い出し・思いつき・納得)、6)フィラー³。

定延は、感動詞「そう」は照応詞「そう」とつながっており、そのかぎりにおいて、感動詞「そう」の意味はゼロではなく、希薄化された照応詞の意味「先行文脈への言及」が残存していると考えられると指摘している。

フィラーとしての「そう」に関する先行研究の指摘を以下にまとめる。

「そう」の機能

- ・気づき(思い出し・思いつき・納得)(定延2002)
- ・新たな情報の展開を予告(森山1989)

- ・自分の発話に対する肯定応答⁴(定延2002)
- ・考察中であることを表す⁵(定延2002)

2.3 先行研究の問題点

先行研究が挙げる「うん」と「そう」の機能は、研究者によって観点がさまざまである。捉え方が異なるために機能の表現が異なるにすぎないと思われるものもある。たとえば、「そう」の機能として、定延(2002)は「気づき」を挙げているのに対し、森山(1989)は「新たな情報の展開を予告する」という機能を挙げている。この2つの機能は異なるものというよりも、連続したものであると考えられる。

また、分析方法についてであるが、森山(1989)や定延(2002)の研究は、仮説を立て、それを言語研究者の内省によって検証する演繹的方法による分析である。実際の会話で、「うん」と「そう」がどのように用いられているかについては分析されていない。

山根(2000)は、実際の対談や講演などの談話に現れた「うん」の機能について指摘しているものの、発話末尾、談話末尾に現れたものしか扱っていない。発話の冒頭や発話途中に現れた「うん」についても見ていく必要がある。

永見(2000)も同じく、「うん」の機能に、自分の先行発話を承認するという認知処理状態を示すという一つの機能のみを指摘している。

以上見てきたように、先行研究では観点がさまざま、また、「うん」については、限定された用法・機能のものしか見られていない。

定延(2002)は「うん」と「そう」を取り上げてその機能を考察しているが、2つの表現の相違点については明記していない。また、「そう」は「意味が希薄」で、「うん」は「意味がない」と指摘するにとどまっている。

そこで、本稿では、実際の会話に現れた「うん」と「そう」を分析し、それぞれの表現がどのように用いられているか、また、これらの表現形式がどのように談話管理に関わっているかについて、先行研究で指摘されている機能を援用しながら、実証的に考察を行う。これは、実際の会話に現れた「うん」と「そう」を前後の文脈から分析することによって、会話における機能を帰納的に明らかにしようとするものである⁶。分析の際、「うん」と「そう」の相違点についても考察を行う。

研究の方法

3.1 会話データについて

本稿では分析資料として日本語母語話者の雑談を用いる。

ここで「雑談」というのは、例えば相手に依頼をすとか道を尋ねるといったやりとりのように何らかのはっきりした目的のために行われるものではなく、相手と会話というコミュニケーションを行うということ、つまり、話すこと自体が目的であるようなやりとりを指す。

分析に用いた会話は全部で5つである。会話はすべて友人同士のペア二人によって行われた。会話参加者にはJS1からJS10までの番号をふって、表記した。

収集した5つの会話データのうち、会話参加者JS3とJS4、JS5とJS6、そしてJS

7とJS8の会話は、名古屋大学言語文化部(当時)の音声録音室で1999年の9月から10月にかけて収録したものである。より自然な会話を行ってもらうため、話題の設定は行わず自由に話してもらった。被験者には、友人同士で録音室に来てもらい、30分程度自由に話すよう指示し、適当に会話を終えてから録音室から出て来てもらうという方法で録音した。身分は全員大学院生である。

JS1とJS2、JS9とJS10の会話は、MDレコーダーを渡し、親しい20代の女性の友人と2人きりで話す機会があれば録音するように依頼し、収録された会話である。収録は、1999年の2月から3月にかけて行われた。会話参加者は、大学院生と会社員である。録音場所は特に指定しなかった。収録は研究室やホテルなどで行われた。また話題の設定も特に指定しなかった。

分析に用いた5つの会話の合計録音時間は約3時間半である。

5組の会話は収録場所こそ異なるものの、いずれも20代女性の友人同士2人による雑談を録音した自然会話であるという点で共通している。話題は特に指定しなかったが、勉強や趣味、ペット、旅行の話など、個人的なことが話題となっている場合が多かった。

3.2 会話例の表記方法

会話データを文字化する際、基準となる単位として、「ターン」という単位を用いた。

ターンは、「会話において一人の話者が話す権利を行使するその会話中の単位で、会話の当事者によりその何らかの意味または機能を持っていると認められたもの(メイナード1993: 56)」である。

このメイナードの定義は、概念的なものである。本稿では、実際にターンの認定を行う際、李（1998）の定義に従った。李は「ターン」ではなく、「発話順番」という用語を用いている。

「発話順番」を「一人の会話参加者が話し始めてから話し続けることをやめるまでを指すもの」とする。（李1998: 43）

会話例を示す際に、ターンの番号を左端に表示する。

文字化の際に用いた表記記号を表1に示す。

表1 文字化に用いた表記記号

.	ターン末記号
-?	その発話が上昇音調であることを示す。
()	相手の発話途中に発せられた相づち的な発話のうち、発話権を取得していないもの。 例 JS8: なんか それ 犬 ニュースで 見たのはー (うん) なんか レトリバー (うーん) ラブラトルか よく 分かんないけどー
< >	重なって発話された部分は< >で括る。
[>]	後ろの<>で括った部分と重なっていることを示す。
[<]	前の<>で括った部分と重なっていることを示す。 例) JS6: でも なんか あた

しはねー ほんとうは 要約 だけじゃなく感想も書かなきゃ <いけない>[>].

JS5: <あたしねー> [<] ほとんど 要約しないでー この前 一個書いたやつはねー (後略).

[=! L] 発話の途中に現れた「笑い」を示す。

■ 会話例を示す際、注目している部分を網掛けで表示する。

出現位置からみた「うん」と「そう」

4.1 「うん」と「そう」の出現位置

本稿の会話データにおける「うん」と「そう」の出現位置を表2に示す。表2は、ターンとの関わりから見た「うん」と「そう」の出現位置である。

表2 「うん」と「そう」の出現位置

	「うん」	「そう」
ターン冒頭	2 (15.4%)	2 (8.7%)
ターン途中	8 (61.5%)	21 (91.3%)
ターン末	3 (23.1%)	0 (0%)
合計	13 (100%)	23 (100%)

表2から、「うん」「そう」ともに、多くの場合、ターン途中で用いられていることが分かる。

ターン冒頭でも、「うん」「そう」とも用いられていたが、その割合はどちらも低かった。

ターン末では「うん」のみが用いられ、

「そう」は用いられていなかった。

先行研究において、永見(2000)、山根(2000)は、文末あるいは発話末における「うん」の機能にのみ注目していた。しかし、表2の結果が示すように、本稿の会話データでは、ターン冒頭やターン途中で「うん」が現れていた。

次に、それぞれの位置で出現した「うん」と「そう」が会話においてどのように用いられているか、実際の会話例を見ていく。

4.2 ターン冒頭

ターン冒頭では、「うん」「そう」とともに2例見られた。まず、ターン冒頭に現れた「うん」の会話例を挙げる。

(例3)

- | | |
|---|--|
| 1 | JS1: うーん 感想は聞いてない。 |
| 2 | JS2: 本当-?. |
| 3 | JS1: 聞いたっていうか 行ったって言うからー (うん) 友達もすごい行きたいってよかったよっていうことだけを伝えた ([=! L]) [=! L]. |
| 4 | JS2: うん おもしろい 推理とかなんかかって (ふーん) だけでさー 私が借りたのは全部英語なんだけどー. |

(例3)の「うん」は相手の発話を受けて発せられたものなのか、あるいは、次に話す内容を思いついたり、思い出したことを相手に示すもののどちらともとらえられる。前者の場合、相づちと重なる部分がある。

堀口(1997: 77)は、先行研究から、相づ

ちの定義を、「話し手が発話権を行使している間に聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」としている。

ターン冒頭の「うん」は、それまでの相手の発話を受けたものとして用いられた場合、相づちと重なる部分があるが、相づちは聞き手として用いられるものであるのに対し、フィラーは、話し手が用いるものである。(例3)では「うん」を発した話し手が、その後ターンを取って、話を続けている。

(例3)の「うん」は、会話において、なくても不自然ではないが、「うん」を用いることで、それまで聞き手だった会話参加者が、ターンを取得し、自分の発話を切り出しやすくしていると考えられる。

次の(例4)も、ターン冒頭に現れた「うん」である。

(例4)

- | | |
|---|--|
| 1 | JS3: (前略) 晴れてないとねー
海 つまんないからね (ねー) 色も全然違うしねー. |
| 2 | JS4: うん 違うしねー (ふーん)
沖縄 行ったことはー-?. |
| 3 | JS3: ないなーい. |

JS3とJS4の間で海が話題になっており、ターン2の途中で、JS4が「沖縄 行ったことはー-?」という質問につなげる部分である。

ターン2の冒頭でJS4は「うん 違うしねー」と述べているが、この発話は、その前のJS3の発話と同じことを繰り返している。Tsui(1994: 41)は一般的に直前で行われたやりとりについての認め機能(acknowl-

edgement)がある発話を「フォローアップ」と言っている。ターン2のJS4の「うん 違うしねー」は、直前のJS3の発話を繰り返すことで、相手の発話を認めたというフォローアップを行っている発話である。

(例4)の「うん」は相手の発話につながる際、会話の中であったほうが自然である。話し手は「うん」を用いることで、相手の発話を受け、それに納得し認めたことを相手に明示することができる。

次に、ターン冒頭に現れた「そう」の出現状況を見てみる。

(例5)

- | | |
|---|---|
| 1 | JS4: 芸術の秋ということで (そうだよ) はーい. |
| 2 | JS3: そう けっこう何回も 出たみたいだったけどねー Kちゃん. |
| 3 | JS4: うーん 一度もねー 行っ行ってない [=! L]. |

(例5)は、JS3とJS4が、二人の共通の友人であるKちゃんのコンサートと一緒にこうと話している部分である。

ターン2の冒頭でJS3が「そう」で発話を始めている。この発話は、それまで2人で話していたKちゃんのコンサートへ行くという話に続けて、Kちゃんがコンサートに何度も出ていたという情報を追加している箇所である。

森山(1989: 74)は、「アー ソウダ」や「アッ ソウソウ」のような句を自己想起類とし、新たな情報の展開を予告すると述べている。そして、これらは談話展開の方向づけのうち、特に転換の機能を持つと指摘

している。

実際の会話例を見てみると、(例5)のように、特に話題転換が行われていないようなところでも「そう」が用いられている場合が見られた。

定延(2002: 91-92)は、感動詞「そう」に、「気づき」の機能を認め、「気づき」の下位分類として、思い出し、思いつき、納得を挙げている。

(例5)の「そう」は、定延が挙げる気づきの機能のうち、思い出しに該当するものと考えられる。JS3は、自分の中で思い出した情報を切り出す際に「そう」と発している。JS3は「そう」によって、自分が何かを思い出したことを聞き手に示すことで、情報を切り出しやすくし、ターンの取得・維持を円滑に行っていると考えられる。

続けて、ターン冒頭に現れた「そう」のもう一つの例を見てみる。

(例6)

- | | |
|---|--|
| 1 | JS4: (前略) あのー 沖縄行っ
たでしょう-?. |
| 2 | JS3: うん ちょう どうだったの
ー-?. |
| 3 | JS4: そう その話をさー 今日
しようかなーと思って 一応
なんか ちょっとそんなこと
を考えて (あー 本当に)
来たんだけど. |

(例6)はJS4が沖縄旅行についての話を始めようとしている部分である。沖縄旅行についての話題の切り出しは、ターン1で行われている。その話題の切り出しに対して、JS3が「どうだったのー-?」と聞き、

それを受けて話し始める際、JS4はターンの冒頭で「そう」を用いている。この「そう」も(例5)と同じく、新しい話題を始める発話ではなく、事前に切り出した話題について、話し始める部分である。

この「そう」は、(例5)のように、これから話すことに対する気づきというより、相手の「どうだったのー?」という発話を受けたことを示すものと考えられる。JS4はターン1で「沖縄に行った」という新たな話題を切り出している。ターン3は、ターン1ですでに切り出した話題に続けて話し始める箇所である。JS4は、ターン3の冒頭で「そう」を用いて、相手の発話を受けたことを示すことで、ターン取得を円滑に行っている。

以上、見てきたように、ターン冒頭の「うん」「そう」は、会話において、ターン取得や発話開始を円滑に行うために、話し手・聞き手双方のために役立っていると言える。

4.3 ターン途中

次に、ターン途中の「うん」「そう」を見してみる。

「うん」「そう」ともに、ほとんどの場合、ターン途中で用いられていた。

まず、ターン途中に出てきた「うん」を見てみる。

(例7)

- | |
|---|
| 1 JS2: ディスカッションとかって
うまく進んでいくもの-?. |
| 2 JS1: うん けっこうねー だから
事前に このー いくつかポ
イントを出してー こうい |

ことについては どうですか っていうのを出すとー (あ ー) けっこう うん でき るものかな おもしろいけど なかなか 大変 それ それ がね(後略).
--

(例7)はJS1とJS2がディスカッションについて話している部分で、JS2がJS1に実習で行った授業について、「ディスカッションとかって うまく進んでいくもの-?」と問い、それに対して、JS1がターン2で答えている。

先行研究では、永見(2000)および山根(2000)が「うん」は自分の先行発話に対する話し手自身の承認や納得を表明する機能を持つと指摘している⁷。

しかし、(例7)の「うん」は、先行発話に対する承認や納得を表しているのではなく、自分がこれから話す内容に対する話し手の納得あるいは確信を表していると考えられる。「うん」の後には、それまでの発話の結論とも言える「できるものかな」が続いている。

定延(2002)は「そう」の機能のところ、気づきを挙げていた。(例7)の「うん」も、話し手が次に言いたいことを思いつき、それに対して、話し手自身が納得していることを表していると考えられる。

次の(例8)もターン途中の「うん」の例である。

(例8)

- | |
|--|
| 1 JS4: でー ちょうど 帰ってくる
ときにー (うん) あのー
那覇でねー なんか 大きい |
|--|

お祭りが.

- 2 JS3: あ そうなの-?.
- 3 JS4: あってー (うん) まあ
だから その日とか 空港か
なり人いたよー うん 帰り
多かったんじゃないかなー.
- 4 JS3: へえ ふうん.

この場合も、(例7)と同じように、「うん」の後には、それまでの発話の結論とも言える「帰り 多かったんじゃないかなー」が続いている。この「うん」も、話し手の気づきと後続発話に対する納得・確信を表している。「うん」があることで、話し手がこれから話すことに納得・確信しているということを示すことができ、聞き手の注意を引くのに効果的であると言える。

次に、「そう」の例を挙げる。

(例9)

- 1 JS1: わたし だから どんなマンガ
がなんだろうと思って ギャ
グマンガなんだー.
- 2 JS2: あれ ギャグマンガ ギャグ
マンガ.
- 3 JS1: あー <よかった> [>].
- 4 JS2: <わ わりと> [<] 笑えるよー.
- 5 JS1: あ ほんとー.
- 6 JS2: かならずや そう 絶対 そ
の方向かーって 感じだもん
[=! L].
- 7 JS1: あ ほんとー.

(例9)ではJS1とJS2があるマンガの話の流れについて話している。

この「そう」も定延(2002)でいう気づ

きの「そう」だと思われる。この場合、前後に「かならずや」と「絶対」が用いられており、「そう」とともに、これから話す内容に対する話し手の納得あるいは確信が表れている。

もう一例、ターン途中に現れた「そう」の例を挙げる。

(例10)

- 1 JS9: 新製品をー 考えて 提出す
るって ゆうの させられる
んだよー.
- 2 JS10: ほんとにー-?.
- 3 JS9: んー で なんか そのー
その そう おばさんで.
- 4 JS10: おばさん [=! L] ですかえ.
- 5 JS9: なんか なんかさー (んー)
パートだったけどー んー
なんか それのたんびに
(んー) なんか なんかい
のなにかねーって ゆってー.

(例10)では、JS9のお母さんのパートが話題となっている。

JS9は、ターン3で「なんか そのーその」と次の発話がなかなか出てこない様子に続いて、「そう おばさんで」と言っている。この「そう」も定延(2002)の気づきの「そう」にあたり、JS9自身の中で、やっと次の発話を思いついたことを示している。これらの「そう」は話し手が次に話す内容があることを相手に示すことで、ターンを維持するのに役立っていると思われる。

ターン途中に現れた「そう」は21例あったが、前後の文脈や音調からその機能を見

ると、(例9)や(例10)のように、気づきの「そう」として用いられていた。

4.4 ターン末

ターン末では、「うん」のみが用いられ、「そう」は現れていなかった。

ターン末の「うん」の例を挙げる。

(例11)

- | | |
|---|---|
| 1 | JS3: なんて 言った -? 向こうの人. |
| 2 | JS4: あ 北海道の人も そうだったけど 内地の人って 言うんだよね. |
| 3 | JS3: あーあーあー (うん) そうだそうだ. |
| 4 | JS4: 別に 私 外とか 内とかっていう (うーん) 感覚ないんだけどな (うーん) とか 思うけど あー そう思うのかーとって うん . |
| 5 | JS3: そうだよな 内地って言うわ そういえば. |

(例11)は、JS3とJS4が「沖縄の人が本土の人をどう呼ぶか」について話している部分である。JS3が「なんて言った -? 向こうの人」とJS4に質問をしている。ここでJS3が言う「向こうの人」とは沖縄の人のことである。JS3の質問に対して、JS4はターン2で「内地の人って言う」と答え、ターン4でそれに対する自分の考えを話している。そして、自分の意見を述べた最後に「うん」を用いている。JS4は「うん」の後には続けて発話を行わず、それまで聞き手だったJS3が発話権を取得し、ターン

を始めている。

この「うん」は、「自分の先行発話に対する話し手自身の承認・納得を表明する(定延2002, 永見2000, 山根2000)」ものである。そして、「こちらの出力が終わったので、そちらで処理に移らねたいという信号(田窪・金水1997: 265)」を相手に伝えている。

「うん」を用いることによって、その時点では「話し手自身、自分の先行発話に納得しており、これ以上付け加える情報はない」ということを意味している。「うん」の後にはターン移行可能場所となる。ただし、「うん」の後で必ずしもターン移行が行われるとは限らない。(例11)では、それまでの聞き手だったJS3が、「うん」を受けた後で話し始めたのでターンの移行が起こったが、それまでの聞き手が「うん」の後でターンを取ろうとしない場合はターン移行が生じない。

ターン末の「うん」も会話において絶対不可欠ではない。ただ、ターン末に「うん」と用いることで、それまでの話し手は、「今までの発話に自分自身満足しており、それ以上付け加えることはない」と聞き手に示すことができる。ターン末の「うん」は円滑なターン移行に役立つと言える。

4.5 まとめ

ターン冒頭、ターン途中、ターン末とそれぞれの位置に出現した「うん」と「そう」について、実際の会話例をもとに見てきた。

まず、本稿の会話データにおける「うん」「そう」の機能と出現位置の関係を、表3、表4にまとめる。

表3 「うん」の機能と出現位置

機能	ターン冒頭	ターン途中	ターン末
1) 話し手が次に言いたいことを思い出し、それを切り出す合図 これから話すことに対する話し手の納得・確信を示す			×
2) 直前の相手の発話に対するフォローアップ		×	×
3) 「それまでの自分の発話に納得しており、今の時点でこれ以上付け加えることはない」ということを表す	×	×	

表4 「そう」の機能と出現位置

機能	ターン冒頭	ターン途中	ターン末
1) 話し手が次に言いたいことを思い出し、それを切り出す合図 これから話すことに対する話し手の納得・確信を示す			×
2) 直前の相手の発話に対するフォローアップ	×	×	×
3) 「それまでの自分の発話に納得しており、今の時点でこれ以上付け加えることはない」ということを表す	×	×	×

次に、それぞれの出現位置での「うん」「そう」の分析・考察結果をまとめる。

4.5.1 ターン冒頭

「うん」「そう」ともに、話し手が次に言いたいことを思い出し、それを切り出す合図として用いられていた。

「そう」によって切り出される情報は、話

題を転換するものではなく、それまでの発話に追加する情報であった。

ターン冒頭で「うん」「そう」を用いることで、話し手はこれから話す情報を切り出しやすくしている。

会話において、ターン冒頭の「うん」や「そう」がなかったとしても不自然ではない。しかし、ターン冒頭で「うん」や「そう」を用いることで、それまで聞き手だった会話参加者が、ターンを取得し、自分の発話を切り出しやすくなると考えられる。ターン冒頭の「うん」「そう」はターン取得や発話の切り出しを円滑に行うために、話し手・聞き手双方のために役立つ。

4.5.2 ターン途中

「うん」「そう」ともにほとんどの場合、ターン途中で用いられていた。

ターン途中の「うん」や「そう」はなくても不自然ではないが、次に話す内容があることを聞き手に示すことで、話し手はターンを維持しやすくなる。また、話し手自身がこれから話すことに納得・確信があるということを示すことができ、聞き手の注意を引くためにも効果的である。

4.5.3 ターン末

ターン末では、「うん」のみが用いられていた。ターン末の「うん」は、自分のそれまでの先行発話に対する納得を示していた。

定延(2002: 82)は、自己の発話に対する肯定的応答として「そう」が発せられることがあると指摘しているが、本稿の会話データでは、この機能として「そう」は用い

られていなかった。

このことから、話し手自身が自分の先行発話を振り返って「自分のそれまでの発話に納得しており、今の時点でこれ以上付け加えることはない」ということを表す場合、「そう」よりも「うん」の方が用いられやすいのではないかと推測できる。ただ、本稿の会話データでは用例が少ないので、今後、さらに多くのデータから検証する必要がある。

ターン末の「うん」は「話し手自身、先行発話に納得しており、これ以上付け加える情報はない」ことを表すため、「うん」の後はターン移行可能場所となる。

ターン末の「うん」もなくても不自然ではないが、円滑なターン移行に役立つものと考えられる。

会話例から見る「うん」と「そう」の相違点

で、「うん」と「そう」について、ターンとの関わりから分析・考察を行ったが、ターン冒頭とターン途中においては、「うん」と「そう」の機能に目立った違いは認められなかった。ターン末においては、「そう」は見られず、「うん」のみが用いられていた。先行研究では、「うん」「そう」ともに、自分の先行発話に対する納得を表明する機能が指摘されていたが、この機能としては、「うん」のみが用いられていた。また、ターン末に「そう」ではなく「うん」が用いられたということから、これ以上話すことはないという態度を相手に示したり、話を切り上げる際には、「うん」の方が「そう」よりも用いられやすいのではないかと推測で

きる。

ここでは、会話に現れた「うん」と「そう」をそれぞれ置換すると、不自然になる場合、あるいは伝達の仕方が異なる場合を取り上げる。

5.1 「うん」を「そう」に置換できない場合

5.1.1 「うん」に続けて自分の意見を切り出す場合

次の(例12)は、JS4がビーチについて話している箇所である。

(例12)

JS4: すごく汚いけどー (うーん)
でもねー 誰でも (へー) 行
ってねー (うん) その
うん ビーチ すっごいきれいだ
ったよ。

この「うん」は、後続の発話に対する話し手の確信を表している。「うん」を「そう」に変えると、「ビーチ」という語を思い出しているのととることができる。

話し手が自分の意見を切り出す場合の「うん」には、次の(例13)のように、「うん」にまとめの発話が後続する場合も見られた。

(例13)

- 1 JS2: ディスカッションとかって
うまく進んでいくものー?.
- 2 JS1: うん けっこうねー だから
事前に このー いくつかポ
イントを出してー こういう

ことについては どうですか
 っていうのを出すとー (あ
 ー) けっこう うん でき
 るものかな .

(例13)は、「うん」にそれまでの発話の結論部分が後続している場合である。JS1は、相手の質問に対して答えており、最後に、「できるものかな」とまとめている。このように、「うん」にそれまでの発話のまとめとなる内容が後続する場合、「そう」に置換すると、話し手は「そう」と言いながら考えているところであるととることができ、話し手の確信度が低くなる。

5.1.2 「うん」に続けて、話を切り出す場合

(例14)

- 1 JS3: なんか それは すごいよく聞くわー なんか (うん) 高校の 今 ほ なに 多いんでしょー? 修学旅行で (うん うん) 沖縄行くー人が .
- 2 JS4: いっぱいいいたよー 行ったときも [=! L] .
- 3 JS3: やっぱり そうなんだー (うん) 修学旅行軍団がいるんだー (そうそう) そっかー うん なんか 友達も (うん) 引率とかで 今年の修学旅行は 沖縄よー とか言ってー [=! L] なにそれ 先生たちで 決めたんじゃないのとか言ってたけど (後略) .

(例14)は、JS3とJS4が沖縄について話

している箇所である。ターン3の「うん」はその前の発話と後続発話に区切りを入れ、後続発話に話し手が納得・確信して話し始めることを示している。この「うん」を「そう」にすると、話し手の後続発話に対する確信というよりも、次の発話を思いついたということを表していると捉えられる。

5.2 「そう」を「うん」に置換できない場合

5.2.1 「そう」に続けて、話し手が自分の意見を切り出す場合

(例15)

- 1 JS10: 読まんですんでもー 後悔し
 んのでしょう? .
- 2 JS9: まあ また 読みたいと思え
 ば 借りればいいんだから .
- 3 JS10: そうそうそうそう .
- 4 JS9: あ そう こう 今度 大学
 院の人に借りてるマンガを返
 す前に もっぺん読むか .
- 5 JS10: [=! L] なに? .
- 6 JS9: コブラと超人ロック .
- 7 JS10: なーるほどー そうきたか .

定延(2000: 92-95)は、「そう」が発話中に考えていることになかなか結論が出ず、考察中であることを表す際につぶやかれる場合、「そう」の音調はなだらかな下降か、低く平坦であると指摘している。(例15)の「そう」も下降調であった。また、(例15)では、「そう」に続いてすぐに「こう」が出てきている。「こう」は、「情報を思い出しているマーカー(Philips 1998: 158-159)」である。(例15)の場合、「そう」と「こう」

が連続しており、このとき話し手はまだ次の発話を考えている状態であると考えられる。

(例15)の「そう」を「うん」に置き換えると不自然である。これは、「うん」がこれから話すことに対する話し手の納得・確信を表すからであり、話し手自身、次に話すことをはっきり考えられていない状況では、「うん」を用いることはできないからである。

(例16)

- 1 JS9: 「あさきゆめみし」とかだったからー。
- 2 JS10: んー もったいない。
- 3 JS9: あるところでは やっぱり **そう** 価値が高いマンガじゃん それなりにねー (んー) いいマンガやったしー (後略)。

(例16)は、JS9が捨てたマンガについて話している箇所である。ターン3の「そう」は、話し手が次に言うことを考えながら発話していることを表している。この「そう」を「うん」にすると、これから話すことに、話し手自身、納得していることを表すと思われる。

次の(例17)も、「そう」に話し手の意見が続いている場合である。

(例17)

- 1 JS1: で いつでも 見えるじゃん ね (んー) うーん それもあるし もう 一人でひたれるじゃん [=! L] (んーんー) ってゆうのもあるよねー。

2 JS2: てゆうか なんかねー (んー) **そう** じっとしてるのが だめなのかもしれない。

3 JS1: [=! L] そりゃー いかんわ。

(例17)は、JS1とJS2がビデオ鑑賞について話している箇所である。この(例17)の「そう」は、話し手が次に言うことを考え、思いついたことを表している。「そう」を「うん」に変えると、これから話すことに話し手自身が納得していることを表していると捉えられる。(例17)の「そう」を「うん」に置換することは可能だが、その場合、先に述べたように、情報伝達の仕方が異なってくる。

以上のように、「そう」を「うん」に変えると、これから話すことに対する話し手の納得・確信の表明が強くなる。「そう」を「うん」と置換しても不自然ではないが、伝達の仕方が異なる。

5.3 置き換えても、不自然にならない場合

最後に、「うん」と「そう」を置き換えても不自然ではなく、伝達の仕方も変わらない場合として、自分の発話を振り返る際に用いられた「うん」を挙げる。

(例18)

- 1 JS3: ふーん そっかーって。
- 2 JS4: へー そう そう思ってるんだーって。
- 3 JS3: うーん 思うよねー。
- 4 JS4: て 初めて聞いたときは 思った (うーん) **うん**。
- 5 JS3: そっかー いいなー。

(例19)

- 1 JS4: A & Wとか言うね (うん)
ファーストフード.
- 2 JS3: え-? 知らない.
- 3 JS4: 私 それ そこでー ルート
ビア売ってるんだけどー
(へー) なんか そんな
初めて (うん) 入ったの
まあ アメリカには (うん)
そこら中に (うん) ある
らしいんだけどー 周りでー
いっぱいあるのー 沖縄
(そうなんだ) うん.
- 4 JS3: やっぱり なに 兵隊さんが
多いから.

(例18)(例19)は、ターン末に現れた「うん」である。この「うん」は、話し手が相手の相づちに合わせ、それまでの自分の発話を振り返り、納得していることを表している。この「うん」を「そう」に変えた場合、「そう」にも「自分の発話に対する肯定応答(定延2002: 81-83)」の機能があるので、「うん」と同じく、相手の相づちに対してフォローアップを出しつつ、それまでの自分の発話に納得していることを表す。

5.4 まとめ

本節は、図1および図2のようにまとめられる。

図1 ターン冒頭・ターン途中で「うん」と「そう」を置換した場合

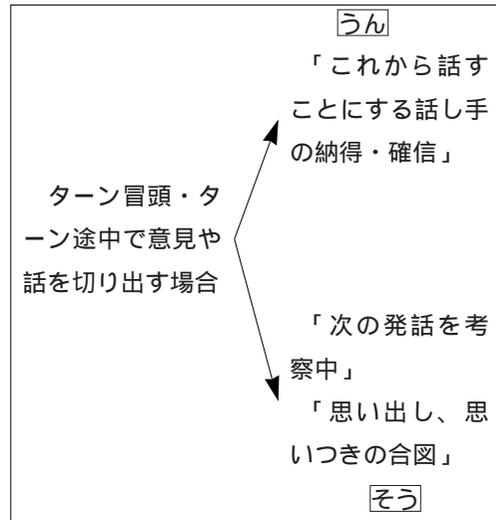


図2 ターン末で「うん」と「そう」を置換した場合

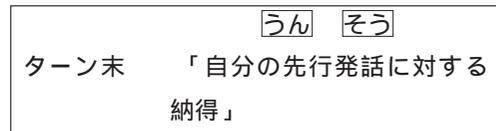


図1は、ターン冒頭あるいはターン途中で「うん」「そう」に続いて、話し手が自分の意見や話を切り出す場合である。この場合、「うん」は話し手が次の発話に納得しており、確信があるということを表すのに対し、「そう」は次の発話を考えている、あるいは、次に話すことを思い出した、思いついたということを表す。そのため、置換すると伝達の仕方が異なってくる。

図2は、ターン末で「うん」「そう」が用いられた場合である。この場合、「うん」「そう」ともに、話し手が自分のそれまでの発話を振り返って、納得していることを表す。

おわりに

以上、フィルターのうち、先行研究で「意味がない」「意味が希薄」とされている「うん」と「そう」について、実際の会話に現れた用例から機能を考察した。

その結果、確かに、「うん」「そう」は、会話において具体的な先行文脈や指示対象を指しているわけではないが、談話管理の観点から言うと、情報の切り出しやターンの取得、維持、譲渡に関わっていることが明らかになった。

森山（1989: 84-85）は、「談話の進行を管理するために我々のとっている社会的行動」の一つとして、「演技性」を挙げている。「演技性」とは、「あえて自分の情報の状態をあえて演技するという現象（p.84）」である。

たとえば、気づきの機能を持つ「そう」を会話で用いれば、話し手はもともと話そうと思っていたことだったとしても、「まさに今、思い出した」という状態を相手に示すことができる。そのため、その情報を切り出しやすくなる場合もあるだろう。

このように、「うん」や「そう」はストラテジーとして用いられ、会話の進行を円滑にするものの一つと考えられる。

また、本稿では、「うん」と「そう」の相違点を明らかにすべく、会話データに現れた用例において、それぞれを置換するという方法で考察を行った。しかし、明確な相違点を挙げるのが難しく、置換して不自然とまでは言えないが、伝達の仕方が異なる場合を挙げるにとどまった。この理由として、次の2点が挙げられる。第一に、「うん」と「そう」がフィルターであること。も

ともと、「実質的な意味や具体的な指示対象を持たない」ものをフィルターとしているので、類似した機能を持つと思われる表現を置換しても、その違いを明らかにすることは難しい。第二に、本稿の分析データが、雑談であったことが挙げられる。フィルターの使用が、談話の種類や待遇度、会話参加者の属性に影響されることは先行研究で指摘されている（山根2000, 2002, Philips1998）。会話参加者の属性の異なるデータを用いたり、タスクやインタビューを設定したデータにおいて「うん」と「そう」を見れば、それぞれの相違点をさらに明らかにできると考えられる。

注

- 1) 会話例の表記方法については、本稿の において述べている。
- 2) 永見（2000: 9）は、“filled pause”を「発話産出時に問題が生じた際に、対話相手とのインターフェイスを保持するために用いられる、問題処理の認知状態を示す標識」と定義している。
- 3) 定延と著者のフィルターの定義は異なる。定延は、フィルターを「発話中に考えていることになかなか結論が出ず、考察中であることを表す際につぶやかれる」ものとしている（定延2002: 92）。
- 4) 定延（2002: 82）は、「そう」が自分の発話に対する肯定応答として用いられる場合として、次の例を挙げている。
 - ・「ツバメって渡り鳥なんだよね、そう。」
- 5) 定延（2002: 92-93）は、「そう」が考察中であることを表す場合として、次の例を挙げている。
 - ・「来週の、そう（ねえ）火曜にきてもらいましょうか。」
 - ・「参加者は会場にびっしりで、そう（ねえ）百人ぐらいいたと思います。」

日本語母語話者の雑談における「うん」と「そう」

・「なにしろ病人ですから、贈り物っていつでも、
そう(ねえ) むずかしいですねえ。」

6) ザトラウスキー(1993: 5-6)は、「会話の分析は、経験的な方法を必要とする。つまり、内省に基づく資料を用いた従来の言語分析ではなく、実際の観察データに基づく帰納的な方法によって分析できるのである。」と述べている。

7) 本稿の 先行研究(p.2-3)を参照。

引用文献

ザトラウスキー, ポリー.1993.『日本語の談話の構造分析 - 勧誘のストラテジーの考察 - 』くろしお出版.

定延利之.2002.「「うん」と「そう」に意味はあるか」
定延利之(編)『「うん」と「そう」の言語学』ひつじ書房:75-112.

田窪行則・金水敏.1997.「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会編『文法と音声』くろしお出版:257-279.

永見昌紀.2000.『発話産出時の問題処理に関わる心的操作標識 - 日本語母語話者と日本語学習者を対象に - 』1999年度大阪大学大学院文学研究科修士論文.

堀口純子.1997.『日本語教育と会話分析』くろしお出版.

メイナード・泉子・K..1993.『会話分析』くろしお出版.

森山卓郎.1989.「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』第1号:63-88.

山根智恵.2000.『現代日本語の談話におけるフィラー』
岡山大学大学院文化科学研究科 博士学位論文.

.2002.『日本語の談話におけるフィラー』

くろしお出版.

李麗燕.1998.『日本語母語話者の雑談における「物語」 - 会話管理の観点から - 』名古屋大学大学院文学研究科博士学位論文.

Halliday, M.A.K. & Hassan, Ruqaiya. 1976. *Cohesion in English*. Longman. (安藤貞雄他・訳.1997.『テクストはどのように構成されるか』ひつじ書房.)

Philips, Mieko Kimura.1998. *Discourse Markers in Japanese Connectives, Fillers, and Interactional Particles*. Ph. D. dissertation, Michigan State University.

Tsui, A. B. M. 1994. *English Conversation*. Oxford University Press.